同志社よ、その名は一つの目的を意味する

One Purpose

2022 Summer | Vol.207

【特別対談】
太田教授 × 桝助教
これからの働き方を展望する

【同志社人訪問】
映像ディレクター
本田 大さんに聞く

特集 「働く」の未来

同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

DEAR
母校—
ALMA
人生の原器として
MATER

Vol.2

同志社京田辺会堂 光館（HIKARI-KAN）

ガラスウォールから差す光は明るく降り注ぎ、
水盆に反射する光は柔らかに変調する。
「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」
ここは、自由主義の象徴「光館」。
学生たちの自由な交流を促す、光あふれる空間。

Check ☞
右記QRにて特別ムービーをご覧いただけます。

モデル／陳ヶ尾 祐月さん グローバル・コミュニケーション学部 グローバル・コミュニケーション学科４年次生

INDEX

02　DEAR ALMA MATER 同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）

特集「働く」の未来

04　特別対談 政策学部・総合政策科学研究科 教授　太田 肇 ×
元日本テレビアナウンサー　ハリス理化学研究所 助教　桝 太一

08　脳科学研究科 教授　髙橋 晋

10　男木島倉庫プロジェクト
副代表　山口 佑太さん（生命医科学部4年次生）

12　宇治市役所 職員　吉田 真知子さん

14　データでみる同大生の 2021年度 就職状況

16　2021年度 大学決算／2022年度 大学予算

18　ゼミで学ぶ 魅力を語る

20　本学教員の執筆図書紹介

21　同志社人訪問　映像ディレクター　本田 大さん

24　My Purpose 挑戦する人　大島 泰真さん（スポーツ健康科学部1年次生）

お知らせ

「One Purpose」は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションを図ることを目的として発行しています。
同志社大学の最新情報は随時ホームページでお知らせしております。ぜひご覧ください。
▶ https://www.doshisha.ac.jp/

卒業生の住所変更、発送停止を希望される場合の連絡先は以下にお願いします。
校友課 TEL：075-251-3009　MAIL：ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp

特集 Special Feature

「働く」の未来

新型コロナウイルスが猛威を振るい、私たちの暮らしや働き方は、大きく変化しました。中でもテレワークやウェブ会議、副業解禁など急激に進んだ働き方の変化は、日本企業に深く根付いた慣行を揺さぶり、私たちの就労観、ライフスタイルにまで見直しを迫っています。今号では「働く」をテーマに、太田肇教授と桝太一助教による特別対談、研究の新分野開拓に挑む本学教授、強い意志と大胆な行動力で納得のいく進路をつかんだ学生たち、仕事と趣味を両立して生き生きと働くOGをご紹介します。

〝自分らしさ〟

特別対談

コロナ禍が変えた働き方

太田　テレワークが言わば外圧となり、日本の企業が大きく変わってきていると感じます。これまで日本の組織や働き方は集団主義、共同体型で、人を(職場に)シフトするのが基本でした。ところが、コロナ禍では「ひっくな」。ベクトルが全く逆向きなんです。

桝　場所の制約がなくなり、働くことの純度がより高まった感じがします。働くって、いろんな要素が絡んでいますよね。中心部で働きたいとか、この集団の中で働くとか。僕自身、テレビ局で働きたいという気持ちの中に、「汐留のあの大きいビルで働きたい」みたいな不純な動機も少なからずありました。今の学生さんは、そういうものから解き放たれた就職ができるのか、その変化も見てみたいですね。

太田　副業解禁のインパクトも大きいです。本業は生活のためで、副業で自己実現や将来のキャリアを形成するという選択肢ができた。大企業の方に聞くと、テレワークや副業ができるかどうかで、優秀な学生が来るか来ないか大きく左右されるといいます。

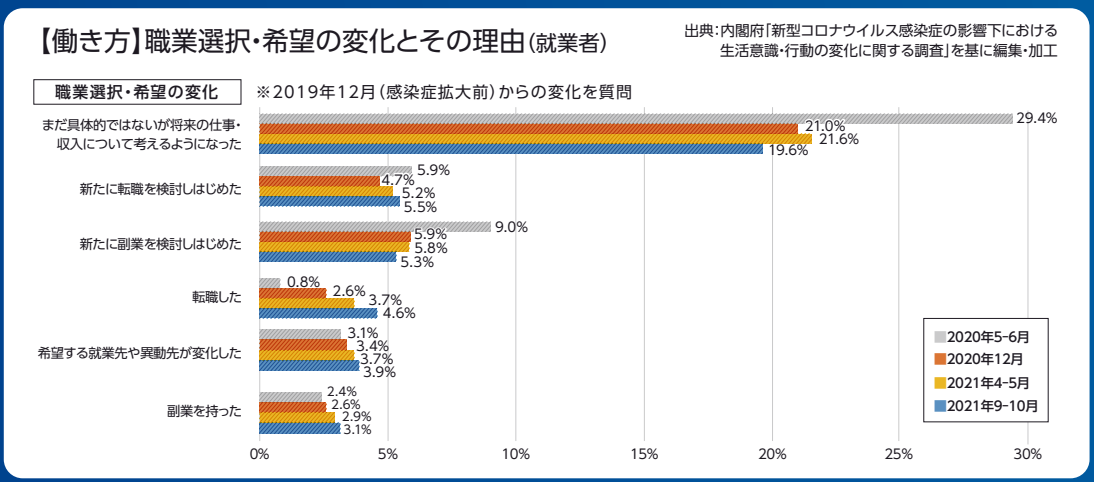
桝　企業単体の生産性でいうとネガティブに思えますが、受け入れざるを得ないんですか？

太田　受け入れているんです。今まで大企業や役所のマインドは、社員をコントロールしようというのが基本にありました。ですが、テレワークでコントロールできないと、割り

政策学部・
総合政策科学研究科 教授

太田（おおた） 肇（はじめ）

1954年、兵庫県生まれ。神戸大学大学院経営学研究科博士前期課程修了、京都大学経済学博士。主な研究分野は「個人を生かす組織・社会づくり」。働き方改革や社員のモチベーションアップなどをテーマに講演、テレビ出演、著作執筆と多方面に活躍中。主な著書に「日本人の承認欲求―テレワークがさらした深層」(新潮新書)、「同調圧力の正体」(PHP新書)など。



追い求める

切ったところが出ているようです。スピンアウトできるかどうかが社員の働きがいやモチベーションに大きく関わってくる面もあります。独立を考えている人は、自分のためにもっと働く。私は「ステップ型就職」と言っています。要はウィンウィンになればいい。

桝　独立を最終目標にしている社員が集まると、案外、企業の生産性が高くなるのかもしれませんね。とは言え学生さんにしたら、例えば30歳で辞めるかもと思う就職って不安じゃないでしょうか。

太田　それもありますが、定年までここにいるという恐怖もあるといいます。静岡県のある新聞販売店の話ですが、100人ほどの会社で、かつては社員が3年で約8割辞めるほど離職率が高かったそうです。そこで3年で独立できる制度を導入したところ、誰も辞めなくなった。社員に話を聞くと、「3年という目標があるから働き続けられる」というんです。

桝　自分で設定するというのが大事なのかもしれませんね。30歳、40歳など、どこかで一度、「これからどうしよう」と立ち返って考えるタイミングを設定しておくと、かえって働きやすくなるのかもしれません。

「働く」という意味が問い直されている

桝　僕は働く理由を、自己実現の手段だと捉えてきました。生き物が好きで、生き物がいる現場に行けそうな仕事として、たまたまご縁があったのがテレビ局です。したいことを

元日本テレビアナウンサー
ハリス理化学研究所 助教
桝（ます） 太一（たいち）

1981年、千葉県生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科を修了後、日本テレビに入社し、報道から情報番組、バラエティーまで幅広いジャンルでアナウンサー、キャスターを務める。2022年3月に退社し、研究員に転身。キャスターを務める「真相報道　バンキシャ!」への出演を続けつつ、科学と社会をつなぐ学問分野「サイエンス・コミュニケーション」の研究・実践に取り組む。

時代が大きく変わる今こそ

させてもらうには、バラエティーにも出ないと社内評価が上がらないし、ニュースをやらないと信頼が得られない。そういう感覚でやってきました。

太田　強い志向や目標を持った人は、桝先生のような生き方ができるということですね。人生設計の上で優先順位を付けることは大事です。自分が優先するのはプライベートとの両立なのか、野心なのか、社会貢献なのか。順位を付けておけば就職を考える時、そう迷わずに済むと思います。

桝　そもそも働くことと生きがいとを、重ねる人もいれば個別にする人もいると思うんです。僕は重ねようとしてきましたが、アナウンサーという仕事の中では、重ならない時もありました。副業としてサイエンス・コミュニケーションに携わり続けてきた結果、そっちが本業になったという感じです。なので必ずしも働くことや自分の今の仕事に、やりがいや生きがいを重ねすぎなくてもいいのかなと思います。

太田　そうですね。もう一つ、テレワークの限界が出て、自宅で働いていると、むなしさを感じるという人がいるんです。会社にいると、声をかけられたり、いろいろな人間関係ができたりします。そうした「無形の報酬」をもらっていたことに、テレワークになって気がついたと。これからは一つの働き方として、「コラボレーション&コミュニティー」が広がっていくのではないかと思っています。仕事を核にして皆が集まり、そこをコミュニティーとしていい関係を築いたり認められたりして「無形の報酬」も得られるという私の造語です。最近だとコワーキングスペースや異業種交流会、ネット上の世界など。これが今かなり広がっています。

桝　オンラインゲームが好きなので、「無形の報酬」という感覚はすごく分かります。僕はたまたまゲームでしたけど、それが仕事であってもいいわけですね。

太田　はい。コミュニティーに仕事を持ち込むなという風潮がありますが、職場の地位を持ち込むから嫌がられるんです。デザイナーだとかアナウンサーだとか、フラットな関係で持ち込めば嫌がられません。

桝　上下関係ではなく、水平関係で得られる報酬ですね。たしかに若い後輩たちを見ていると、地位を得ることより、同年代から褒められたり評価されたりする方を喜ぶ気がします。

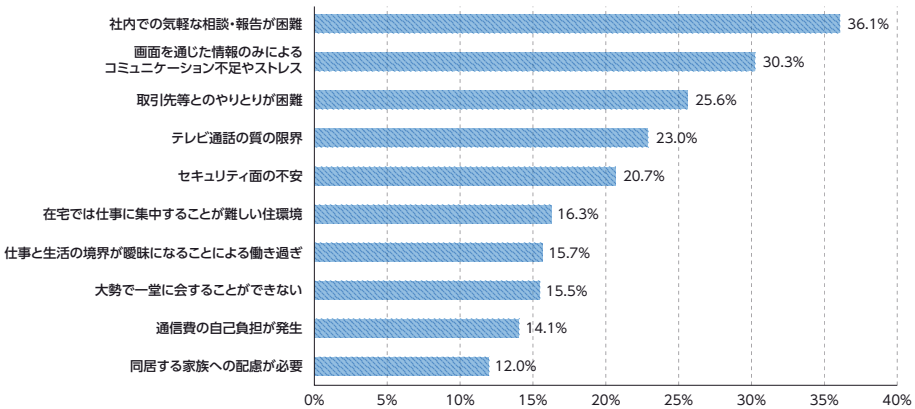
行動することを恐れず、尖った存在になろう

太田　自分を生かす場を見つけるためには、行動することが大事です。最近ではインターンシップが就職に直結するようになっていますし、実践を通して自分を知るという機会が増えてくるように思います。

桝　「動く」ということのハードルが、ものす

【働き方】テレワークのデメリット（テレワーク経験者）

出典：内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」を基に編集・加工



自ら「動く」勇気を

ごく今、いい意味で下がっていると感じます。田島木綿子さん（国立科学博物館研究員）というクジラ研究の第一人者がおられるのですが、その方は学生時代、学びたい研究者全員に手紙を出し、1通だけ返ってきた方の下へ教えを乞いに行かれたのだそうです。相当気合を入れて動かないと、リターンが得られなかった時代だった。今は極端な話、ツイッターのDMでコンタクトがとれます。求める人材とつながることが、こんなに容易になっている時代はないのだから、動かないともったいないと思います。

太田　私は「能力時価主義」と呼んでいます。経歴や学歴にほとんど意味がなく、今何ができるか、個でどれだけ話がつけられるかが問われています。

桝　動く時にはかなり勇気が要りますけどね。僕自身、辞めるときはすごく悩みましたし、辞表を書いたときの手の震え方は尋常じゃありませんでした。

太田　桝先生でもそれだけ不安を感じられたのですか。

桝　僕はもともと保守的なタイプで、好きな言葉は「現状維持」なんです。ただ、それは待遇や社会的地位ではなく、僕自身がやりたいことの現状維持です。30代は生き物関係のことにも触れさせてもらい、やりたい仕事をいっぱいさせてもらいました。でも40代、50代になったらできなくなると自分で分かったので、現状維持のために出たという感覚です。飛び込んでしまえば、意外と何とかなります（笑）。

太田　先ほどの能力時価主義とも関係してくるのですが、テレワークの世界は基本的にフラットですから、今後、管理職の影響力は小さくなっていくでしょう。情報が共有されるようになり、ゲートキーパー（門番）としてコントロールすることができなくなる。〝管理〟職というより、ファシリテーター（世話人）やグループリーダーのようになっていくと思います。

桝　総フラット化社会の中で突出するには、どんなジャンルでもいいから、自分にしかできないというものを持つことが鍵なのかなと思います。今までは企業の中で役立つものでないと意味がなかったけれど、今は何か一つ尖ったものがあれば、それを求めている人はどこかにいるし、それが見つかる世界にもなりつつありますね。

科学の伝え方を研究・実践するため、新たな一歩を踏み出した桝助教。「現状維持」を続けるために、独自のキャリアを築き上げていく

太田　そうですね。私は、組織で働くことと自営業との境界が薄れてきていると思います。例えば雑誌の取材を受けると、別会社の人やフリーランスがいて、本社の人だけというのはほんの一部。組織の内と外が曖昧になっています。

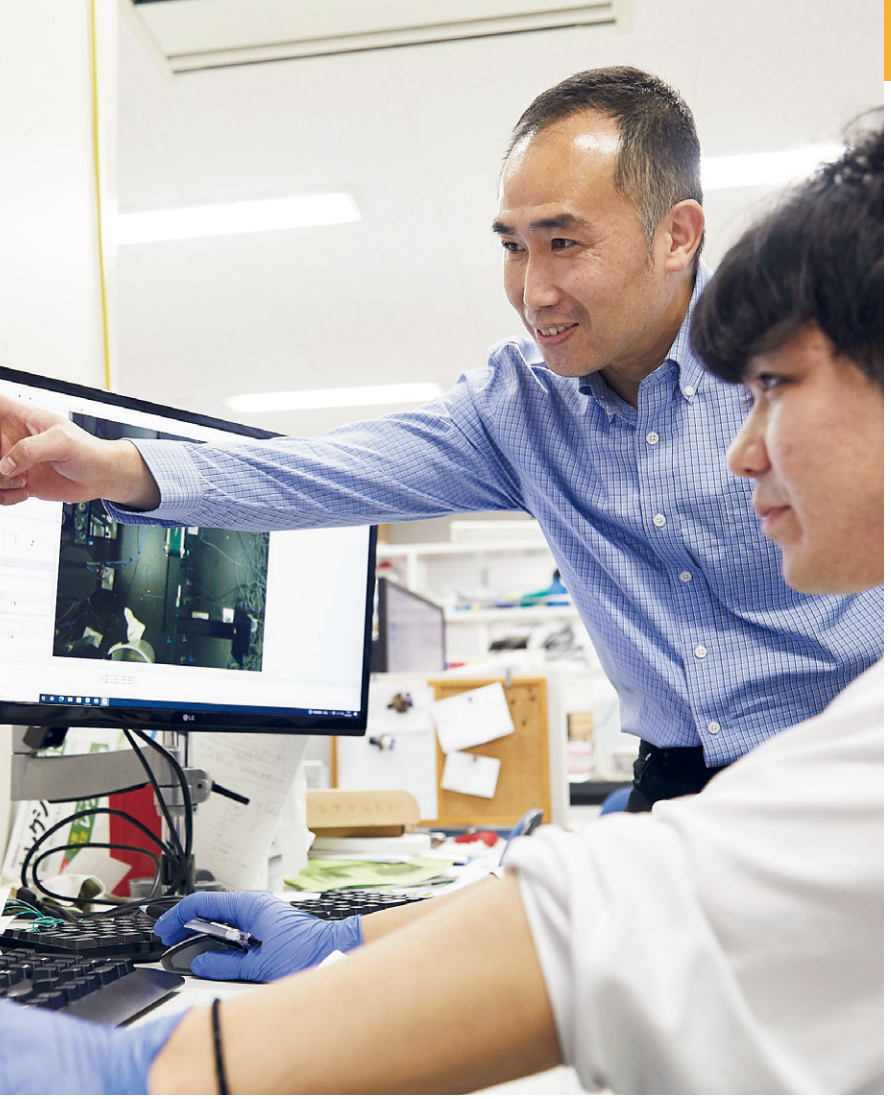
桝　いろいろなスペシャリストが、必ずしも同じ企業の中にいなくてもいい。突出した個を持つ人たちを、一つのイベントごとに集めればいいということですね。

太田　それが一般的になってくるのではないでしょうか。自分の好きなことは何かを考えるのは難しいですし、やってみないと分からないこともあります。学生たちには、自分の能力とキャリアは自分で築いていいということを意識して学生生活を送ってほしいと思います。

桝　大学生活で、これだけは誰にも負けないという一つの尖った武器を見つけてほしいですね。就職先の選び方で言うと、僕はよく、「宝くじで10億円当たったら、今の仕事辞めますか？」と聞くんです。それで辞めようと思う仕事は選ばないでほしい。「多分辞めないかな」と答える人は、やっぱりいい仕事をしてるんです。ちなみに先生は10億円当たったら今のお仕事は？

太田　辞めません。定年が来ようが、死ぬまで第一線で仕事がしたい（笑）。

桝　良かった。僕も辞めません（笑）。



「得意」を磨き研究の最前線を切り開く

脳科学研究科 教授
高橋（たかはし） 晋（すすむ）

慶應義塾大学の学生時代はコンピューターサイエンスを専攻。人工知能に興味を持ち、大学院で安西祐一郎教授（元慶應義塾長）に師事するも、まず人間の脳を知ろうと学外で生理学や脳科学、心理学を学ぶうち、脳の奥深さに魅了された。個人の体験に基づくエピソード記憶が、脳の海馬の中でどのように形成・貯蔵・読み出しされるのか。渡り鳥などの長距離移動を可能にするナビゲーションのメカニズムはどうやって脳内で実現されるのか。この二つをメインに研究している。

「渡り鳥の脳内に、北の方角を向くと活発に活動するコンパスのような細胞を発見した」。2022年2月、脳科学研究科の高橋晋教授が名古屋大大学院の環境学研究科と共同で発表した研究成果は、多くのメディアを賑わせた。何の目印もない空を、なぜ渡り鳥は数千キロ先の越冬地まで迷わずに飛んでいけるのか。その謎の解明に、一歩近づいたとの期待が高まったからだ。当の高橋教授は「まだ仮説の段階。これから厳密に検証していくんです」と淡々としている。発見そのものより、さらに研究を深められることの方が楽しみな様子だ。

異色の共同研究で新分野に挑戦

新潟県・粟島で営巣する海鳥のオオミズナギドリは秋、本州を迂回する海上ルートで南半球の越冬地を目指す。海上風を利用する省エネ飛行だが、巣立ったばかりの幼鳥は、まっすぐ南へ、危険な山越えルートを行くという。本州の地形を知らないため迂回できないにしても、ではどうやって南を感知するのか。高橋教授は幼鳥の頭に測定機器を取り付け、様々な方向に歩かせて脳神経活動のデータをとった。その結果、幼鳥の頭が北を向いたとき、活発に活動する「頭方位細胞」があることを発見。方向をつかさどるこの細胞は多くの生物に見られるが、特定の方位に反応するものは初めてだった。

新たなヒナが巣立つ今秋には、さらに詳細に、頭方位細胞と地磁気との関係を調べる予定だ。生まれた川に戻ってくるサケの習性についても日本大と共同研究しており、生態学と脳神経科学という異色のタッグで、長距離移動する野生動物の「ナビゲーション機能」解明に挑む。

研究者として、新たな分野に挑むことは楽しい。

ただ、ラットやマウスと違い、野生動物相手の実験にはかなり苦戦もしたそうだ。「オオミズナギドリの脳を調べた人なんていないので、麻酔から、脳を固定する手術道具まで、全て自作するところから始めました。マス（サケ科）の脳に至っては、小さい上に深いところにあるのでよく見えない。個体によって頭の大きさも違いますし、実験動物がいかに実験向きに作られているか、よく分かりました」と高橋教授は振り返る。

また、研究者同士とはいえ、分野が違えば実験手法も異なる。正確なデータをとるため幼鳥を箱の中に入れた同じ観察手法でも、生態学者からは「不自然だ」と言われ、論文を査読した神経科学者からは「もっと厳密にすべきだ」と言われた。「分野の壁を越えるのは、まだ時間がかかりそうです」。

地道な積み重ねの先に未来を見据えて

困難も気苦労も多い研究を続けられるモチベーションは、どこにあるのだろうか。そう尋ねると、意外にも、苦労は感じていないという答えが返ってきた。

名古屋大学 後藤 佑介研究員提供

水面をなぐように滑空することからその名が付いたオオミズナギドリ。成鳥は翼を広げると1.2メートルほどに

「私は自分の研究を、好き嫌いではなく、得意かどうかで選んでいます。もともとコンピューターサイエンスを専攻しており、電気工学や電子工学は得意。野生動物向けの計測装置でも、ニーズがあれば作れますし、やっていて楽しい。それに、他分野の研究者と話すと、たくさんの気付きがある。小学校の夏休みの自由研究をやっている感じですね」。未知のものに出会い、その謎を解き明かす。根気の要る作業を楽しめるからこそ、第一線の研究者でいられるのだろう。

だが、研究には、〝楽しみ〟だけでなく、〝成果〟も求められる。高橋教授は長く、脳にある海馬の研究を続けており、個人の体験に基づく「エピソード記憶」については第一人者だ。認知症との関連が深いと考えられるこの研究について何度も論文を出し、プレス発表もしているが、今回の「渡り鳥」ほど取り上げられたことはないと苦笑する。かといって、「渡り鳥」の研究が、単に知的好奇心をくすぐるだけのものとは思っていないともいう。

「脳の活動を調べる装置は研究室では有線ですが、屋外で行った今回は、無線のシステムを投入しました。脳の活動と機械をつなぐ『ブレイン・マシン・インターフェース（BMI）』の研究でも使われる、最先端の機械です。我々がしている研究は、今は人間の役に立つものではないでしょう。でも、野生動物でいろいろ試した技術がBMIの要素技術となり、未来でつながっていくのではないかなと、実は思っています」。地道な積み重ねの先に、新しい未来を切り開く。

脳細胞の働きを解き明かすため、計測用などの装置を自作することもしばしば。実験対象は極小のため、繊細で正確な手技が求められる

研究者としての自負を感じさせる言葉だった。

研究者であると同時に教育者でもある高橋教授は、学生たちにも、打ち込めるものを見つけてほしいと願っている。

「私自身がそうであるように、自分が得意なことを見つけ、伸ばしてほしいと思っています。自分の得意を見つけるのは難しいことですが、せっかくの長い学生時代、好き嫌いせずいろんなことにチャレンジし、継続的にやってみて、得意なものを見極めてほしいですね」